越えたが、ビブリスは膝まで入つて渉ち渡らなければなりませんでした。ビブリスは全く安心して居ました。今彼女は、正しい行路を辿つて居るといふことを信じて居ました。疑ひもなく牝鹿は彼女の信仰に對する滿足のしるしとして女神手づから遣はされたのでした、そしてこの神聖な獸は森森を通つて彼女を愛する兄の元に導くのでした、彼女はもう決して二度とは其兄と離れないでせう。一歩は一歩と彼女がカウノスに會ふ場處に近寄るのでした。彼女はすでに、その胸にかの落人のいとしい抱擁をさへ感じることができるのでした。彼の呼吸の一部がこの大氣の中に這入つて居て、すでに微風を迷せてるやうにさへ思はれました。

と急に牝鹿は立ち止りました。牝鹿はその長い頸を二本の若樹の間に挿し入れました、と同時にそこに牝鹿の角が見えました、牝鹿はもうその旅

が終りに達したかのやうに、蹄を體の下にしてその頸を投げ出してごろりと横になりました。

『カウノス！』とビブリスは聲高く呼びました、『カウノス、何處に居るの？』

彼女の受けた唯一つの答へは、かの牝鹿からでした、といふのは、牝鹿は乙女の方に數歩進み出て、丁度十疋の褐色の蛇のやうにからみ合つて居る、その恐ろしい角で彼女を嚇やかしました。

そこでビブリスは、牝鹿もまた、自分のやうに、その戀人に會ひに來たのだといふことが解りました、そしてかうしたまるで自分達の心の中なら熱い思ひに魅せられて居る者共の助けを待つのは、殆と無益な事だとわかりました。

彼女は引き返しました。がすぐ途に迷つてしまひました。彼女は外の途を取つたのでした、それは見分け憎いやうな小徑に急激に降つて居ました。乙女の哀れな小さな弱い足は、石に蹴躓づき、樹の根にからまり、あるひは朽葉の褐色の絨氈の上にすべるのでした。小川の流に沿うて居る、この凸凹道の曲角で、乙女は神々しい夫婦に會つて立ち止りました。

かれらは聖職を異にしたふたりのニムフでした、そのひとりは森林を、またもひとりは河泉を司配つて居るのでした。山の神は河泉の神に、人間から受け取つた新鮮な捧げものを持つて來ました、そしてふたりで流れに浴し、ゆあみしながら戯れ合つたり抱き合つたりして居ました。

『河泉の神（ナイアッド）様、』とビブリスは言ひました、『あなたはシアネの息子をごらんでしたか？』

『左様、彼の影は、私の上を過ぎつて行つた。それは昨日の日暮時でありました。』

『どちらの方からまゐつたのでせう？』

『知りませぬ。』

『どこへ行きましたでせう？』

『蹤いて行きはしませぬ。』

ビブリスは深い嘆息を吐きました。

『あなたは、』と彼女はもひとりのニムフに訊ねました、『シアネの息子をごらんでしたか？』

『左様。こゝから遙かの山奥で。』

『どこから來ましたでせう？』

『蹤いては行きません。』
『どこへ行きましたでせう？』
『忘れました。』
そこでニムフは、流れる水の中に立ちながら、かう言つて言葉をつゞけるのでした——
『私達と止まりなされ、若い娘さん、止まつて居なされ。どうしておまへさんは、あらぬ人のことを思ひつゞけるのです？私達はおまへさんのために、涯知れない現在の喜悦を貯へておきました、苦勞して追ふ値のあるやうな、未來の幸福といふものはあるものではないのです。』
けれどもビブリスは、ニムフが眞實を告げて居るとは思ひませんでした。たとひ自らその小さな心の中の觀念を言ひ現はすことはできずとも、乙女

は幸福を追ひ求めて苦しむよりも大いなる喜悦は考へることもできませんでした。望みもない旅の第一日は、見知らぬ獸の助力と熱誠とに賴りをかけて居りました。然しどれもこれも彼女の運命を助けることにはおかまひなしだと知つた時、彼女は自分ひとりにのみ賴みをかけました、そして曲り迂つた小徑を離れて、でたらめに森の迷宮へと進んで入つたのでした。
然しふたりの神は、その知賢の言葉を繰返しました。
『私達と止まりなさい、若い娘さん、停まりなさい。どうしておまへさんはあらぬ人を思ひつゞけるの？苦勞して追ひ求める値のあるやうな未來の幸福といふものはありませぬ。』
長い、長い後までも、神秘な山を越える時、子供は遙かに、二つの澄んだ聲が、一よに呼んで居る聲を聞くことができました——

『ビブリス！』

三

一夜一日、ビブリスは山を横切りました、乙女は、あらゆる森の神々や、樹の神々、芝地や繁みの神々に、氣遣はしげな質問をするのでした。彼女は度々自らの悲哀を物語りました、彼女は顫へながらかれらのお助けを乞ひ、その小さな手を絞りました。然しかれらの誰もカウノスを見かけませんでした。

乙女はその母の聖い名も避ふ人々に全く知られて居ないやうな高いところまで登つて行きました、まるで無關係なニムフ共は乙女の言ふところがわからなかつた。

彼女は歩みを返さうと思ひました、が彼女は途を失つてしまつたのです。到るところ乙女は巨きな松の樹々の込み入つた列柱に取り巻かれるのでした。もはや小徑もありません。地平線もありません。乙女は方向もかまはず四方八方歩き廻りました。彼女は絶望のあまり叫びました。

耳に入る木魂すらもないのでした。

やがて彼女の疲れた眼瞼が次第々々に低く垂れる時、彼の乙女は地べたにぐつたり倒れてしまひました、そしてふと見た夢は、低い一様な調子で彼女に告げました——

『あなたはもう決して兄さんに會はないでせうよ、あなたはもう決して二度と兄さんを見つめないでせうよ。』

乙女は、手を伸ばし口を開いたまゝびつくりして眼覺めました、然し彼

女はあまりの悲哀と苦悶とに襲はれて、聲を出す力さへないのでした。

月は松の樹々の高く黒い輪廓の蔭に血潮のやうに赤く上りました。ビブリスは殆どそれを見ることができませんでした。濕つたヴェールが彼女の長い眼の上に落ちかゝつたやうに彼女には思はれました。永遠の沈默は眠つて居る森々を裹んでしまいました。

すると大きな涙の玉が、乙女の左眼の隅に集まりました。

ビブリスはこれまでに決して泣いたことがありませんでした。彼女は今自分が死んで行くところであると信じました、そして恰も神々しい慰藉が不可思議な具合に彼女に降つたかのやうに吐息しました。

涙は育ち、頰へ、更に大きくなつて、急にその頰を辷り下りました。

ビブリスは月の光を浴びて、眼を据えたまゝ動かずに居ました。

すると大きな涙が右の眼の隅を充たしました。それは他の一つのやうに大きくなつて右の頬をつる〳〵と辷り落ちました。

もう二つの涙が浮びました、二つの燃えるやうな涙の玉は、他のやつが作つたその濡れた轍を傳つて流れました。それらは口の隅まで來ました。そのよろこばしい苦味が、この疲れ果てた子を襲うのでした。

とするともう、彼女の手は、カウノスの戀しい手に決して觸らないのだ。もう決して、彼女は彼の黒い眼の輝き、親しげな頭、または波打つ髪を見ないのだ。もう決して兩人は、草の葉、樹の葉の同じ褥に、相抱き合うて眠ることはないのだ。森はもはや、彼の名すらも知らなかつた。

絶望の壓し潰すやうな勃發は、ビブリスをしてその手に顔を掩はしめました、けれどもこのやうな涙の大量は、彼女の熱し切つた頬を濕らして、

乙女は、かの瀧の瀨のおもてを流れるわくら葉のやうに、不可思議な泉が彼女の苦悶を洗ひ去るやうに思ひました。

漸次彼女が身に生れた涙は、眼に浮んで、湧き出して、溢れて、その頬の上に溫かい流となつてつつーつと辷り、そのかわゆい胸を洗つて、編み合せた足へと落ちて行きました。乙女はその長い睫毛の間に涙が一滴づつしたゝるのを感じませんでした、涙はしづかな限もない流で、盡きせぬ洪水で、魔の海の溢れであつたのです。

然し月光に眼覺まされて、森の神々は諸々方々から集まつて來ました。樹々の皮は透き徹るやうになつて、ニムフの顔を見えるやうにしました、そしてふるへおのゝくナイヤッドすら、水と岩とを捨てゝこの森へ入つて來ました。

かれらはのこらずビブリスのまはりに群がつて彼女に話しかけました、といふのはかれらは、子供の涙の流が地面に曲りくねつた跡をつけて、なほゆるやかに平原の方へ流れて居るのに、びつくりしてしまつたのでした。

けれども今やビブリスは何も聞くことができませんでした、聲も足音も、はたまた夜の風も。乙女の姿は少しづつ永遠のものとなつて行きました。乙女の皮膚は、涙の氾溢に沈められて、恰も波で洗はれた大理石のやうなする〳〵した白い色となつて來ました。その腕のやうに長い髪の毛を、風は一本も搖かさうとはしませんでした。乙女は純粹な大理石のやうに死にました。ぽつとした光がなほもその幻像を照らして居ました。と、ふとその光は消えました、が乙女の鮮かな涙は、眼からなほも流れました。

かやうにしてビブリスは、泉となつてしまつたのです。

女と木偶

女と木偶

一

スペエンでは、フランスでのやうに、戒肉祭は聖灰日の朝の八時には終を告げない。セヴィル市の不可思議な華かさのうへに、『われらは屍灰よ、』などのおもひでが、たゞ四日のあひだ墓塲の匂ひを展げる、そして四旬祭の第一日曜と戒肉祭とがあまねく甦へるのである。

そはドミンゴ　ド　ピネタス、即ちコルミットの日曜、大祭日當日である。人口多い町全體は、その衣裳を着け換へ、街巷には、もと蚊張や窓掛や女

の衣裳であつたところの、赤、青、綠、黃色、薔薇などの襤褸や端布など
が搬ばれる。それがみな朝日かげを受けて塵く、そしてそれは小軀のなら
ず者に運び去られてしまふ。若者は物騷がしく、色まち〳〵に着飾つて、
假面を着け、大勢の群衆の中を押し歩く。
窓のあたりには、數限りもない薄黑な頭が前の方へ壓し出されて居るの
が見える。かやうな日には、近郊の若い娘といふ娘は、殆とセヴィルの町へ
と流れ込む。紙の金米糖が彩色つた雨のやうに降り注ぎ、扇は美しく化粧
した頭を蔽ひ禦いで居る、低い街路には、喚聲、哀訴、笑聲がひゞく。二
三千の人々がこの戒肉祭にはパリー全體よりも大きな喧騷を惹き起すので
ある。
然るに、一千八百九十六年二月の二十三日に、アンドレ　ステヴェノルは、

戒肉祭の終の近づくのを見て、いさゝか業を煮やさないでは居られなかつ
た、といふのは、その週日が、本質上から見ていろごとの一週間ではあつ
たものゝ、何等新しい冒險をも齎らさなかつたのだ。いつぞや、以前に、
スペエンに滯在した時、なほも原始的なこの國土では、いかに速かにいか
に自由に、友誼情交のきづなが結ばれるかといふことを知つたのであつた。
彼は機會と情勢が、彼にその寵を與へなかつたことを思つて失望した。彼
は若い娘と長い間紙いくさをして居るのだつた。ふたりは戒肉祭時の蛇の
やうに細長い小切で互に戰ひ互に嬲り合つて居た、男は街に女は窓に。乙
女は走り降りて、『ありがたうよ、』と言ふなり、小さな紅の花束を彼にくれ
た。が、さてもさても！乙女はすばやく走り去つてしまつた、そして間近
に殘つた幻影もやがて消えてしまつた。アンドレは花を上衣に挿したが、

興へ手の記憶にはそれを挿しはしなかつた。

數多の時計から四時が鳴り響いた。彼はセルレ　ロドリゴを通つて、船舶輻輳する廣大なグアダルクィヴィール川に沿ふ繁茂した並樹のシャンゼリゼエ、デルシャスに着いた。高雅麗美の人々の戒肉祭を展開するのはこの場處であつた。

セヴィールでは、安逸な階級の人々は、日に三度の食をいつもいつも贅澤にすることはできなかつた、然しかれらはランドー馬車と二頭の馬とを持たずに出るより食を除いて出た方がましだぐらゐに思つて居る。セヴィールには數多の馬車がある、屢々舊式なのも見受けるが、それはその馬で麗しくされ、種も顏も高貴な人々の所有となつて居る。

アンドレ　ステヴェノルは、廣い塵埃だらけの並樹大路の兩側を緣取る群

衆の間を、困難しながら踏み分けた。卵合戰はまだ續けられて居た。紙の金米糖を詰めた卵殼は馬車の中へ投げ入れられた、勿論それは投げ返されるのだつた。アンドレはポケットに卵を詰込んでおいて一心に奮闘した。馬車の流が伍をなして通つた——女、戀人、家族、子供達や友人を滿載して。アンドレがポケットに最後の卵しか殘つて居ないと氣が付いた時は、戰が一時間も續いた後であつた。

突然そこへ、先に合戰でその扇を卵で打破つてやつた若い女が再び姿を表はした。

その女はすてきであつた。その麗美な笑ひのすがたを蔽ひ護つて居た蔭と避場の扇を奪はれ、群集と近くの馬車との攻擊を四面に受け流し、女は勇ましくも奮闘をつぐけた、そして喘ぎながら、帽子もなく、熱さとあか

らさまの歡喜とに面を染めながら、乙女は襲撃を迎へて居るのだつた。彼女は二十二歳位に見えた、そして少なくとも十八歳にはなつて居るに違ひなかつた。女がアンダルシヤから來たのだといふことは、殆ど疑ふ餘地がなかつた。彼女はアラブ民族とヴルダル民族、シエム民族とゼルマン民族との混血から生れた嘆賞すべき典型である。かゝる雜婚のあらゆる完全を持ち來たしたのである。

彼女の體は、すらりとしてたわやかに、あらゆる直線美曲線美を表はして居た。ヱールをかけてあつてすら、女のかんがへを見拔くことができるやうに思はれ、優雅と自由ともて、宛も彼女が、肩や胸で物言ふやうに、彼女はまた手足もて笑ふのだとも感ぜられた。女の頭髪は、濃い栗色であつた、が然し遠からこれを望むと、殆ど黑色に輝いた。その頰は輪廓が非常

にやはらかであつた、瞼の緣はまたひどく黑いのであつた。

アンドレは群衆を押し分けて、女の馬車に近寄り、女をまじ〳〵見まもつた。彼が胸の鼓動は、この女が、彼の生活にとある一役を勤める運命であるといふことを彼に語るのであつた。彼は即座に、ペンシルを以て戒肉祭卵の上に、"QUIERO"といふ語を書いて、薔薇の色を投げるやうに彼女の手へそれを擲げた。

Quieroは驚くべき動詞である。そは『思ふ』であり、『欲する』であり、『戀する』である。そは『求めて赴く』であり、『撫愛する』である。其場合其場合で、用ひ方如何によつては、時に禦することのできない情熱を言ひ表はし、時に輕はづみの出來心を言ひ表はす。アンドレはそれを與へながら、『あたしあなたを愛したいわ』と、言ひさうな顏付を見て取つた。彼女は

一種の手提鞄の中へその奇怪な信書を入れた、そして馬車の流は彼女を運び去つてしまつた。アンドレは後を蹤けやうといふ空な企をしたが、やがて馬車は見えなくなつてしまつた。

悲しくなつて彼は徐ろに歸途に就いた。彼にとつては戒肉祭全體が覆ひ隱されて終つたのだ。彼は更に決然として群集の中に分け入るべきであらうか？いかにして彼は女をまたと見出し得たであらうか？女がセヴィールに住んで居るかどうかそれは確かでなかつた。もし住んで居ないとすれば、彼女を見出すことは不可能であるだらう。そして次第に、不幸な幻影によつて、彼の心が描いて居た影像はいよいよチャーミングになつた。一瞬間の好奇の注目を迎へやうとして停まる女の甘美な容貌のある細微な數點が、今は記憶の坩堝の中で、その優麗な姿勢を作り上げる主要な諸點に變化さ

れた。髪の結びやうに、ある特殊の點があつた、唇の角は極端な可動性を帶びて居た。唇は一轉瞬毎に形と表情とに變化を示した。往々にしてそは殆んど匿され、また屢々そは殆んど上方に曲げられ、圓くされ、細くされ、蒼くなり、また黑くなつた、言はゞ生と靈との變り行く焰で生氣付られて居た。あゝ！おそらくあの顏のすべての他の部分を貶すことができやう——鼻がギリシャ風でないとも言はれやう、頤がローマ風でないとも言はれやう、然しあの小さな唇の隅を見て悅しさに顏赦らめないものは、この世のあらゆる寬裕もなほ手が屆かぬであらう。

かく彼がかんがへは、先へ先へと飛んで行つた、と後から暴々しい警戒の聲が響いた、一輛の馬車が狹い街道をすばやく通つて行つた。馬車の中には一人の婦人が乘つて居たがアンドレを見ると Quiero と書き記した卵

を、薔薇の花を投げるやうに、しづかに彼の方へ投げた。

然し、さても、その言葉の後には、しかとした飾り書きがあつた。宛も佳人が男の使つた一語の音信に力を入れて答へたかのやうであつた。

二

女の馬車は、街の角を曲つた。アンドレはその後を追つて行つた、最後の機會を失ふまいとして。彼はプラーザ　デル　トリオンフォ街のある家の門を馬が入つて行く時に追ひ付いた。大きな黒い門の扉は、ちらりと見えた女の影法師が入るとすぐ閉め切られてしまつた。

若しも彼が、かゝる情事の凡慮に及ばぬ未知の世界に突入するまへに、未識の婦人の名や家族や、暮し方を手廻しよく聽いておいたのであつたのなら、疑ひもなくそれは更に賢いやり方であつたに違ひない、ところが彼は、このやうなことになるもまるで何も知らなかつたので、何物も意のま

まにはすることができなかつた。アンドレは然しながら、何物かを見出す最初の努力をせずに其場を立ち去るまいと決心した。彼は落ち着き拂つて門のベルを押した。

一人の若い番人が出て來た、が門をば開けはしなかつた。

『あなた様何の御用でございますか？』

『奥方に名刺を持つて行つて下さい。』

『何の奥方へで？』

『こゝに住んで居られる方へ、といふつもりですが。』

『と申してもそのお名前は？』

『君の奥方が私を待つておいでになるのだよ。』

男は辭儀して、お願ひするといふやうな手振をした、それから門も開け

ず名刺も取らずに引込んでしまつた。

やがてアンドレは、二度三度と鈴を押した。憤怒の情が彼を不作法にしたのである。

『このやうな型の宣言にかくも早く答へる女は、』彼は考へた、『男が會はうと言つて聽かなかつたからとて別に驚く筈のものでない。』戒肉祭や酒神祭が、常の社會生活で許されない徒らの痴行をも許すものだといふことは、彼には思ひも付かなかつたのである。

どうすればいゝのだらう？彼はあちらこちらと歩き廻つた、然し女の姿も見えず何の形跡も辿れなかつた。家の近くに厩舎守が居た、アンドレは賂を取らせて聞き質した。然しその男は答へた——

『奥方はわしを買收しておくんでさ、わしがあの方のこと誰かに話した

ことを知らうものなら、わしの敵手を買ひ取つてしまひませうぜ。わしはたゞあの方の名だけお話しできるぎりでさ、あの方はマニュエル ガルシヤの奥様で、ドナ コンセプション ベレズ夫人と申しますんで、御亭主様はボリヴィヤに居なさいますがな。』

アンドレはそれ以上聞かなかつた、がホテルへ歸ると、煮え切らない心持で居た。夫が居ないといふことは知つたものゝ、あらゆる機會が彼に左袒して居るといふことはまだわからないのだ。言はうと欲すること以上に知つて居るらしい説明者の沈默は、他にも一人更に幸福な戀人があつて、已に選ばれた位置に即いて居るのだなといふ考へを人に殘すものだ。門に居たしもべの態度が、この見苦しい後思案を增さしめるのであつた。

アンドレは二週間の中にパリーへ歸らねばならなかつた。その二週は、美

しい若い夫人の生活に這入り込むことを、計畫し實行するに充分であつたらうか、その生活は、おそらく疑ひもなしに、計畫せられ、圓滿にせられ、完全になつたものであつたらうか？

かく疑惑に苦しめられてあるあひだに、一通の手紙が彼の手許に屆いた。封書には住所氏名がなかつた。彼は言つた、『この手紙が僕のとこへだといふのは確かかえ？』

『アンドレ ステヴェノル様へとして、私共へたしかに手渡されたのです。』

手紙は青いカードに書かれてあつた、そしてそは、次のやうなものであつた——

『アンドレ ステヴェノル様、さやうに物さわがしくなさるまじく候。お名を通せむとし、またわらはが名をお求めなさらぬやう願はしう候。もし

明日三時頃、エムパルメ街を御遊歩あそばさば、馬車の通り行くを御覽あるべく候。馬車は止まることゝ存じ候。』

アンドレは生活のいかに容易いかを考へた、そして來らむとする入魂の幻を已に描くのであつた。彼はまた、コンセプレオン、コンシヤ、コンシタ、シタなどゝいふ惚々するやうな名の、最もやさしい小さな形を求めて呟くのであつた。

三

翌朝アンドレ ステヴェノルは、かゞやかしい眼覺めを經驗した。光は四つの窓を備へた室に漲つた。また彼の耳には、都會のつぶやきが聞えて來た。馬の過ぎ行く蹄の音、街巷の叫び、驢馬の鈴、尼寺の鈴の音なども響いて來た。

彼はこのあしたほど、幸福な朝を味つたことがあらうとは、どうしても思ひ出されなかつた、いや、長い間といふもの、まるでなかつたのである。彼は、腕をばたりと投げ出して、それをうんと伸ばした、それから自分の胸の周圍に、それをきつく組み合せた、しきりと待ち構へて居るかの抱擁

の幻影か豫想を、自らに與へるかのやうに。

『生活の事柄つてものは、何といふ容易しい、何といふ單純なものだらう、要するにさ、』かく彼は微笑しながら考へた。『昨日、今時分、私はひとりぼつちだつた、心を充たす一つの物もなく、殆んど一つの考へもなしに。ただ散歩するだけが必要なんだ、それでまあ見ろ！場面の變化を、情事がもう眼の前に見えて居るんだ。はねつけられるとか、侮蔑されるとか、そのやうなことに氣を遣ふ必要なんてあるものか。欲して求める、そこで女が身を任せて來る。そうでなくて、どうあるものか？』

彼は立ち上つた、そして閨衣にスリッパといふ姿で、風呂の支度をさせるためにベルを鳴らした。額を窓板に當てゝ待ちながら、彼は眼前に展がる街衢を打ち眺めた、今やそは、晝の活動に充ち滿ちて居た。眼に見える限

りの家々は、セヴィールの町が通常愛好する明るい色に塗られて居る、婦人の衣裳の華かな色彩にも似たる色——クリーム、薔薇、綠、橙、菫などの色で、カディズかマドリッドの怖ろしい鳶色や、イェレズの粗末な白色ではなかつた。そこには果實をつけた橙の樹が見えて居た、走り流れる泉や、ショールをきちんと掛けた笑ひさゞめく乙女等も見えた。かなたよりもこなたよりも、驢馬の鈴の音が聞えた。アンドレはセヴィールならでは——他に住むべき土地を、想像することができなかつた。

彼は衣裳を纏ひ終つた、そして徐かに濃い西班牙チョコレートを小カップ一杯すゝり込み、それから打ちつくろいた心持で、殆どあてもなく、忙しさうな街へ出て行つた。

偶然にも、彼は近道を辿つて、プラザ　デル　トリオンフォに出た。そ

れから彼は、彼の所謂『情婦』のやかたへしけ込むのぢやなかつたと氣がついたので、彼はラ　デリシャスに赴いた。其處は、紙や、戒肉祭のおきまりなしるしが撤ばつて居た。そこはまた、人影も絶えて居た、といふのは、四旬祭が再び始まつたのである。それにも拘らず、町の塲末の方から來る道に、アンドレは、見覺えのある男が、自分の方へやつて來るのを認めた。

『今日は、マテオさん、』彼は手を差し出して言つた。『こんなにお早くあなたに會はうとは、僕思はなかつたが。』

『いや、私はこゝにかうして、ひとりぼつちで、怠けてだれきつて居るんですよ。朝と晩には、ぶら〳〵ほつゝき廻つて、一日の大部分は讀んだりどうかかうか遊んだりして潰すんです。いかにもだらけた生活ですなあ。』

『とはおつしやるものゝ、晝の單調を慰める夜がおありでせう、町のおせつかい連の噂を信じて言ふのですが。』

『さういふ噂があるとすりや、それは言ふ人が間違つてるんですよ。今から死ぬるまで、マテオ　ディアズ先生は、その周圍に女をおきやしない。が私のことなどのお話は止しませう。ところであなたは、これからどれほど當地に御滯在ですな？』

ドン　マテオは西班牙人であつた、アンドレは最初スペエンに滯在した時に紹介を受けたのである。彼は華美な言葉遣ひをして、大氣取の身振をするといふ男で、非常な金持であるし、また情事にかけては中々の名取であつた。それでアンドレは、彼が肉の華奢と虚榮とを棄てたと聞いてびつくりしたが、質問で彼を疲らさうとはしなかつた。

ふたりはしばらく河の縁を歩いた、そして彼等の對話はすべてスペエンのこと、その國民、その政治、その歴史に亘つて居た。

すると、『一しよにゐらしつて朝飯や中飯をおやりになつてはいかゞですな、』と、ドン　マテオは言つた。『私のとこはあすこです、デムバルメ街の近くで、三十分で行けますよ、で若しあなたがなんなら、夕方までお止めしやうと思ひますが。あなたのまへで、見せびらかせたいほどの馬がありますぜ。』

『中食のとこは贊成ですが、』アンドレは言つた、『然し長居はできません。今夕は是非共果さなければならない待合があるんです。』

『御婦人と……いやお質ねするのぢやありませんよ。がまあできるだけごゆるりと願ひます。私もあなたの年輩には、私の所謂「神秘時代」の間

にはですね、外界から魔を差されたくなかつたものですよ。その時代にはもう話をしかけたいと思つた人間は、その時その時の女だけでしたからなあ』

ドン　マテオはしばらく默つた、がやがて忠告の口調になつて——

『あゝ、女つてやつには御用心なさいよ！私は何も、女を避けろの遁げろとは申しませんさ、といふのも、私自身今が今まで、生涯を女に費して來たのでしてな。それに若し、私に二度と生きられる生命があるなら、女と過した時日が、第一番に甦つて見たいと思ふ時ですからね。が用心なさるがいゝ、用心なさるがいゝ！』

すると、自分の思想にぴたりと合つた熟語を見出したかのやうに、ドン　マテオは更に徐ろに附加へた——

『どのやうな代價を拂つても、避けなけりやならない二種類の女がありま

す、それはあなたを戀はない女と、戀ふ女とです。この二つの極端の間に、非常な魅力を持つ女がある、然し人はそれを鑑賞ふ仕方を理解んで居ない。』

ドン マテオの快活が、起らずには止まない思想と思想との交迭を、獨白で償はなかつたならば、晝飯はいやに面倒だつたに違ひない。アンドレは心から氣を取られて居た、そして主人が彼に話すことも、半分ぐらゐしか聞いては居ない樣子であつた。出會ふ約束の時間がいよ／＼迫るにつれて、彼の胸のとゞろきは、戒肉祭の時のやうに、彼に戻つて來た、而も一層はげしく。そは彼の心中のしつこい訴へのやうであつた、そして待ちこがれる女の考へ以外に、あらゆる考が彼の頭から追ひやられてしまつた。彼は時計の針が次の時間を指してくれたら、その針にうんと報酬をやりたいと思つたのだが、時計の面は彼の感情には冷淡なもので、時の流はなほ澱ん

だ池の水のそれ以上ではなかつた。

遂に、もはや口を緘んで居るに殆ど堪へられないものゝ如く、彼は主人に不意打を喰はして言ひ放つた——

『マテオさん、あなたはいつもこのうへない忠言をして下さる。一つ秘密を打開けてまた御忠告を頂くわけにはゆきませんか？』

『いゝの位ぢやありませんさ、』スペエン人は答へた、立ち止つて喫煙室の方へ歩を移しながら。

『僕はね、あなた以外の人には誰にも訊ねはしないのですよ、』アンドレはためらひながら言つた。『あなたはドンナ コンセプシオン ガルシヤといふセヴィールの婦人を御存じですか？』

マテオは跳び上つた、そして口早に言つた——『コンセプシヨン ガルシ

ヤ！、コンセプシヨン　ガルシヤ！ところでどれですか？お話しなさい。今日スペエンには、コンセプシヨン　ガルシヤが二萬人もあるのですからね。その名はフランスでジェアン　デッワルとか、マリイーランベールなどいふ名と同じやうに、ありふれた名なのですぜ。その女のも一つの名を聞かせて下さい。どうか。ベレズですか、コンシヤ　ベレズですか？』

『いかにもさうです、』アンドレはすつかりびつくりして言つた。

するとドン　マテオは、はき〳〵した口調でつゞけた——

『コンセプシオン　ベレズ　ド　ガルシア、プラーザ　デル　トリオンフオ二十二番地、十八歳、髪は殆と黒く、口は、それこそそれこそ！何といふ立派な口だらう！』

『いかにもその通り、』とまたアンドレは答へた。

『あゝ！よく名を言つて下すつた。もしこの事件の門口であなたを引き止めることができれば、私の方から言ふと、善を行つたことになり、あなたの方からいふと、まあいゝ運を一つ拾つたことになる！』

『と、その娘は、誰の腕へでも凭れかゝつて來るやうな奴ですか？』

『いやいや。あの女は戀人を持つたゝめしはごく少ない。そしてさういふ場合にも、あの女は貞潔でそして非常に悧巧です、機智もあれば、生活上の知識もあつてな。あれは流暢に踊ります、踊ると同時に巧みにしやべる、そして同様にまたよく謠ふ。それでいゝですかな？』

アンドレが一語も發し得ないうちに、ドン　マテオは再び口を開いた——

『そして而もあの女は、この上もない惡女ですぞ。私はあの女に對して、神様が些の假借もなさらぬことを望んで居る！』

アンドレは行かうとするやうに立ち上つた。

『とはいふものゝ、マテオ君、僕は――この女に就いて、まだ君のやうに話すことはできないが――僕は、今のところで、僕が約束した待合を守らないことは尙更できない。僕は君に自白しました、そして、かうも夙くお暇して、君の方の自白を遮ることを殘念に思ひます。』彼はその手を差し伸べた。

マテオは戸の前に立ちふさがつた。

『まあ聽いて下さい、どうぞ、あなた。私はあなたに言ふ、男が男に對して言ふ言葉として、私は、止まれ！と言ふのですぞ。こゝへいらしつた通りにお歸りなさい。誰に會つたかも、誰が話しかけたかも、誰が手紙をくれたかも、すつかり忘れておしまひなさい。もし平和といふものが、靜か

な夜が、暗黑な不安のない生活が知りたいとお思ひなら、コンシャ ベレズにお近寄りにならぬがいゝですぞ。その女に近づきなさるなよ。私にあなたを救はせて下さい。御自身に惠をおかけなさい、ほんたうにな。』

『マテオ君。して見るとあなたはあの女に戀してるのですか？』

スペエン人は額を撫でゝ、そして答へた――

『どういたしまして？私は今ば、愛しても居なけりや戀しても居ない。もうすつかり濟んで片が付いてしまつたのです、痕さへすつかり消されてしまつたのですよ。』

マテオはアンドレを凝視めた、そしてから、戯談口調になつて、言つた――

『それにですな、女が約束してくれた最初のランデヴに行く男はありませ

んがね。』

『どうしてないんです？』

『女がそこへ來るものぢやないからですよ。』

ある事件の記憶が、アンドレをにやりとさせた、そしてそれが往々眞實であることを承認した。

『隨分さうしたことがあるものでな。それにひよつとして女が來ても、あなたの居ないことは、却つてあなたに對する愛着心を強めるものですぜ。』

短かい沈默が來た。ふたりはまた坐つた、そしてマテオは言つた——

『さあ、聽いて下さい、どうぞ。』

四

三年前には私も、今御覽の通りな白髪はなかつた、そして三十七歳でした、が心持は二十二歳位のものでした。私は何時まあ若さが私から脱けてつてしまつたものか、はつきり覺えても居ません、それに若さがいよ〳〵終に來たのだなどと思ふことは私にやむづかしいんですな。他人は私を情欲のぶらつきものとしてあなたに話したでせう。がそりや僞の皮です。私は戀なるものを尊重しましたね、そして戀を貶しめるやうなことはしなかつたです。情熱的に愛して居ないでその女を抱いたことは殆んどなかつたですな。若し私が戀人の名を指すか數へかしたら、その數の小さいのにあ

なたはびつくりなさるだらう。私は一體青眼金髪の女を愛したことはまるでなかつたといふことを、易々と記えてますよ。私はそのやうな蒼穹めた崇拜の對照物をばいつも輕蔑して來ました。その上に眞實なことは、私には戀は夜業でも遊戯でもなかつたのです。それは私の生命でした。若し私の生命から、女を唯一の目的とした思想行動の一切を取り去つたなら、殘るものはたゞ空虛のみとなるでせう――空間だけしきやね。これだけ申し上げといて、コンシャ　ペレズに就いて私の知つてるところをお話しいたしませう。

私はまづ、三年半前の、冬の頃へ話を持つて行きませう。私はフランスから歸りましたね、そりや辛い寒い旅でしたがな、十二月の二十六日といふ日に、ビダッソア河の橋を通過する急行だつたが。

雪はもう、ビアルリッツやサン　セバスシャンのあたりで已に深かつたので、グィプッコアの横斷を殆と不可能にしたのでした。汽車はツーマルラガに二時間程停車しました、雪を拂ふためですね。夜一夜この雪の惱みつてやつが續きました。物の響は降る雪に鈍らされて、われ〳〵は沈默のうちに旅をつゞけたわけなのです、危險はその沈默に莊嚴な感じを與へました。

翌朝になつてアヴィラに着きましたね。遲れること八時間、食を取らぬこと全一日。おまけに四日間もその場所に『吊し上げられて』居なければならないことが、とう〳〵わかつたわけなのです！あなたはどうした機會かでアヴィラを御存じですかな？それは「古いスペエン」は死して跡なくなどと讃言のやうに饒舌り散らすやうな人間を送るべき場所柄ですな。私のと

まつた宿屋といふのは、ドンゥクィホーテも快く使つたらうと思はれるやうなやつでした。

再び汽車の旅を始める段になつて、私は目先を變へるために三等車へ乗り込んだ、その仕切の中にはスペエンの女が殆んど一ぱいに乗込んで居ました。それには實際四つの仕切られた小房があつて、肩程の高さの隔壁がありましたよ。

さて、われ〳〵はグアデルラマのシェルラを横切つて居ました、と突然汽車はまた止まつてしまつたのですな。われ〳〵はまたも頽雪に遮られたのでした。これがわかると、一同はそれに居合したギター彈手に踊を所望しました。

その女は踊りましたね、醜いジプシー型の、三十ばかりの女でしたが、

四竹を唱らす指にも、腕や脚にも、まるで火があるやうに見えるのでした。すべての人は跪いて耳を傾けたり、または手で調子を取つたりしました。私はその時自分に面して隅に小女が一人居るに氣が付きましたね、その子は謠つて居るのでしたよ。

むすめは薔薇色のスカートをして居ました、その色合で私はこのむすめがアンダルシア——あの色を好む國の者だなと感付きましたな。

むすめの肩と胸は乳色のショールに裏まれ、白い薄絹の襟卷をして寒さを禦いて居ました。列車内の人々はみんな、むすめがサン ヨセ グヴィラの修道院で修業を經たこと、母を探しにマドリッドへ行くところなこと、名をコンシャ ペレズといふこと、などを知つて居りましたね。

私はあの女の聲の抱き締めるやうな調子を、記憶のうちで再び聽くこと

ができますよ――

『なが褥は素馨のかをり、
なが敷布は赤薔薇、
汝が枕は百合のかをり、
黒き薔薇はそこにためらふ。』

と次いで、むすめとジプシーとの間に喧嘩の一幕が開かれました。ふたりはいがみあひましたね、が私は中へ入つて引き分けました、私は一體女が爭つて居るのを見るのが嫌ひでしてな。女共の喧嘩つてやつは惡烈で危險性がありましてね。すつかりその型が付きますと、一人の憲兵がやつて

來て、コンシャの頰ぺたをつゝつきながら、別な小房へ入つて行つてしまひました。汽車は今また走り出しました、して同車の連中は眠り始めました。と小さな女歌唱者のおもざしが私を苦しめる。あの男はむすめをどこへ入れたのだらう？私はふと列車の仕切に凭れかゝりました、すると私は、その女が觸るほど近くに居ることを知つたのです。女は疲れた子供のやうに眠つて居ました。私は閉ぢた瞼、長い睫毛、小さな鼻と二つの小さな唇を見ました、それがいかにも子供らしいと同時にいかにも肉的だつたのですな。長い間驚く程美しい唇を睇め入つて、あの夢の中にぴく〳〵するのが乳を飲ませてくれた胸を想ひ出して居るのか、それとも戀人の唇を思ひ出して居るのかと私は思ひ迷ふのでした。

日の光がさして來た、と共に旅の終が來ました。私は小さいコンシャに、

六つの包を一つに纏めるのを手傳ひ、それを運んでやらうと申し出て見たが、はねつけられてしまひました。女は何とかそれを始末してすた〳〵行つてしまつたんです。私は間もなく女を見失つてしまひました。

おわかりでせう、この最初の會合が無意味であつたといふことが、殆どぼんやりであつたことが、ねえ。女は一寸の間だけ私を面白がらせ樂しませました。ほんとうにそれだけですよ。すぐ私はその女のことを考へるのを、まるで止してしまつたのです。

五

次の夏、私はまたむすめを見付けました。八月に私は自分の家にひとりで居ました、そこは數年間婦人のすがたが詰まり切つて居た家なのですがね。ある午後のこと、死ぬほど厭な氣持になつて、私はセヴィルの官營煙草工場を訪れました。たゞの獨で、こいつは特別の好意なのですな、私は婦人部屋といふやつへ入つて行きました、そこにはどつちかと言へば自墮落な女工共が五千ばかりも居りました。

その日は猛烈に暑かつたと申しましたな？大多數の女工が半裸體のすがたでしたよ。たしかに、ごたまぜといつたやうな光景でしたね、あらゆる

年齢の女のパノラマの一種と言つてもいゝですな。私はずつと這入つて行きました、時にはお恵授をねだられたり、時には皮肉や戯談をあびせられたりしながらね。とだしぬけにも私はコンシャを見かけました、ところでどんな風の吹き廻しでこんなとこへ來たのだと訊きましたところ、

『そんなことわかるものですか、わたし忘れちやつたわ。』

『が君の修道院の修業は？』

『むすめが戸からあすこへ入つたら窓から出てしまひますよ。』

『君もさうしたんかえ？』

『あなたには正直にしませうね。あたし罪を犯すのが怖かつたらあすこへは一寸も入りやしなかつたのよ。銅貨一つ頂戴、あたし何か謠つてあげるわ、取締が居ないうちにさ。』

幸福な人の青年時代には、機會が決定を與へてくれる一刹那、一瞬間があるものです。そのむすめの前へ金貨をごろりと落した時に、私のその刹那は來たわけなのです。それはてうど、これを最後と骰子を投げたやうなものですな。私はその時その場處で、私の實生活の紀元を定めたのです、

『私の最上に生きた生活』をな。私の道徳的墮落は、その時に始まつたのです。

まあ殘らずお話しいたしませう、實の話はとんと簡單なものなんですよ、全く。

私は官營工場を辭して、人影少ない街へそろ〳〵歩いて行きました。そこでむすめは追ひ付いて、かう言ふのです——

『ありがたうよ、あなた。』

私は女の聲の變つたのに氣が付きましたね。黄金色の餞が富といふものに對する欲望を女に起させたのですな。女は程近いカルル　マンテロスの自分の家へと私を連れて行きたいと言ひ出しました。

女は戀人のないことを私に語りましてね、そこで私は答へました——

『ほんとかい、神信心のこゝろから、ないと言ふのかえ？』

『あたしそりや信心深いのよ、けれど誓願をかけたことはありませんの。』

終ひには彼女は、自分の處女であること、それまでにも純潔であるといふことを言つてきかせました。

六

女はこのことを、いかにもあからさまに、いかにも正直な樣して言つてのけたので私は全く顏を赧らめて、心持不安になつて來ました。あの子供らしく見える頭の中にじれつたさうないま〳〵しさうな、あの顏の陰に、何が起つて居るのだらう？　あの決然たる道德的な態度、あの豁達な、そして、おそらく正直な眼、あの誘ふやうな而も拒ねつけるやうな肉的な口は何を意味するのだらう。私の知つて居たすべては女が私を無性によろこばせ、再會したので有頂天になり、女とまた一緒になる他の機會を鶴首して待つて居るといふだけでした。ふたりは女の家に着きました。階下の戸

口で蜜柑を買つてやりました。二階へ行くと女はその三つのノックを戸に〻れました。と、私は母親の前に突立つわけになりました、一度は美くしかつた淺黑い女でしたよ。

それから打明け話が始まりました、それがまあ何時になつたら終るかと思はれましたね。母親は機關士の寡婦だと言ひましてな、それから他所でもう二十遍も聽き古るした話をしましたよ。

『あゝ、カバルレロオ、わたし達はお金持になれた筈だつたにねえ、わたし達ふたりはさ、たゞ邪道をとりさへしなかつたらねえ。けれどね、罪といふものは、こゝで宵越したことはまるでないんですからね！』

コンシタはこの講話の間、頰に白粉を塗つて居ました。すると彼女は、口の相を變へてしまひさうな微笑をして私の方を向きましたよ。

とう〳〵私は紙幣四枚を投げ出してしまつた、そしてコンシタは工場へ戻らないことに取定めたんです。私は翌日また訪ねて行きました。女はひとりで居ましたね。その日女はつとやつて來て私の膝の上に乘つて、燃えるやうな唇でキスをするぢやありませんか。私は女とついと離れました、がそれはたゞまたと戻つて行くためのやうに、あゝ！一度どころか、二十度も、私は若い若い人みたやうに、人間の中のひとりの阿呆のやうに、戀してしまつたのですな。あなたもかやうな狂熱を御經驗でせうから、私を理解して下さるでせう。女のところを立去る度毎に、私は次の會合までの時間を數へましたね、そしてそ〻時間は決して進行しないもの〻やうに思はれた始末です。追々私は、かれらと全一日を過すやうになりました、それにあらゆる費用、あらゆる借財を仕拂つて行つたのですからね。そのため

に隨分滅相な金が要りましたよ。コンシタと私とは語つたは、語つたは！

然し女は測り知ることのできない不思議なものでした。女は私を愛するやうにも見えたのです、私はおそらくほんとに女を愛したでせうよ。今日ですらどう考へていゝのかわからんのです。私のあらゆる訴へに、女は『後程ね、』とばかり答へるのでした。その決心を私はどうしても破ることができんのでした。私は女を威かしました、暴力を以てすらも、それでも女は何氣ない風をして居ました。贈物を積み上げると、女はそれを御自分の條件を付けて受け取る。にも拘らず女の部屋へ入ると、私は女の眼に佯りでないだらうと思はれるやうな光を見るのでした。

女は夜九時間眠つて三時間の午睡をしました、女は他に何もしないのです。家の仕事が母親の受持でしたからね。まる一週間に女は全然朝起する

のを拒む始末です。義務といふものに就いてのこの女の觀念は甚だスペエン式でしたが、戀なるものに就いての觀念は一體何だつたのか私にはわかりかねますな。戀を仕掛けて十二週間の後、私は狂はすやうな微笑のうちに同じ約束を見ました、と同時に同じ反抗をたしかに見ました。

遂に、一日、私は母親に心持を打ち明けて、こがれる思ひを白狀して、その助力を願つたり賴んだりしました。不安で不安で堪へられない一夜一朝經つた後、私は四行の手紙を受け取りました——

『もしあなた樣には妾を愛し給ふ上は、お待ち下さるがよかりしにて候。妾はあなた樣に身を任せたう存じ居り候ひし。あなた樣は妾が寶物となつてあなた樣の手に渡ることをお望みなされ候。妾はもはや再びお目見えいたすまじく候。コンシタ。』

私がセヴィールのその部屋に着いた時、ふたりは所帶をすつかり纏めてとうに雲隱れしてしまつて居たのでした。

七

秋と冬とが過ぎ去りました。追憶は私にとつて慘酷なものでした、私は頭がめちやになつてしまつたのです。おゝ、私はどんなにあの女を愛したことか、ほんとうに！私は時々、確かめるために彼女は驗しをやつてるのだ、私を試みてるのだ、などと考へました。それはどうでもいゝ。私たちはまた會ひました。私はなんでも芝居から歸るところでした、そしてカルル　トラヤノで女が私の名を呼ぶ聲を聞きつけたのです。女は地上から肩だけの高さのある窓に凭れて居ました、夜の裝ひをし肩掛をしてね。

私はうつゝを拔かした人のやうに女を見つめましたな。女は手を私にの

ばしました、私は手や腕やをキスで掩ふやうにしましたね。私は戀のために半ば氣が狂つて居たのでした。私は女の唇を狂望したのだが、やはりただ、『後程にね、』といふ答を聞くのみに終つてしまつたわけです。

私は追つかけ引つかけ質問をしました。かれらは先づマドリッドへ、次にカラバンシェルに行つて居たのでした。私の金で經濟を立てゝ二人は現在の塲處を借りてたのですよ。もう一ヶ月は正直に暮せるだけの金はまだ殘つて居たんですね。

『そしてその後はあたし困つてしまふわよ、あなた眞面目に考へて下さるの？』

と言つて女はしばらく間をおきました。

『あなたはあたしがお解りなさらないのよ。あたしまだ工場へも勤められ

るし、バナヽを賣ることもできるし、花束だつて造れるし、セヴィラナも踊れるぢやありませんか、マテオさん？』

やがてほつと吐息して、前の方へ凭れながら、かう言つた——

『マテオ、あたし明後日あなたのいゝひとになつてよ。』

『おまへ眞面目で言ふんかえ？』

『もう約束しましたわ。おどきなさいよ、マテオ、いら〳〵したり、嫉いたりしちやいけなくつてよ。』

そこで女は行つてしまひました。

八

はてしもつかないやうな二日二晩が過ぎました。私は幸福であつて而も苦しんで居たのです。惱み苦しむ喜悅が、あらゆる他の感情を支配しやうとして居るやうに見えました。出會約束の時間が來た、して私は女が『マテオ』としづかに呼ぶ聲を聞きました。ふたりは熱烈にキスを交はした、そして長い戀愛の場面がつゞいたのです。質問、反抗、哀願。が然し、精神的に肉體的にも、私には甚だ以て重壓緊張の時であつたこの事を、ずつとすつとばして行くために、私はかう言つてしまひませう、コンシャは實際に於て次のことより外承知してくれなかつたのです。即ち私は女と一し

よに住む、女を崇拜する、女を熱烈に愛する、私の好むがまゝに眞實に、そしてまた優しく、が然し、女は全然潔く全然處女で居なくてはならない、とかういふのですな。私はこんな狀態で二週間も我慢しました。コンシャはそこでなほも尠なからぬ金を私から借り出して他の借金を拂ひました、すると翌くる日になつて、私は母親と娘とが再び姿を隱してしまつたこと知りましたねえ！

ま慢がなりません。私はマドリッドへ行つて、イタリヤの踊こを好くやうにならうと努めました。私はセヴィールへ歸つて、そこかクラナーダ、ワルドワ、イエレスへ行きました。私はコンシャ　ペレス探したのです。カディズでわれ〳〵はまた邂逅ひました。ある夕私は料理屋へ行つた。と女は水夫や漁夫の前で踊つて居たのです。私は女を見たその瞬間體がぶる〳〵して胸がわく〳〵して。私は蒼くなつたに違ひない、私はもう、呼吸も、力も、意志も、まるでないやうに思はれましたね。私は戸に近い席にどつかり腰を下すと、頭を兩手にかくしながら女を

睜めました。踊は濟んで、女は私の方へやつて來ました。誰も彼も女を知つて居る始末、四方八方から『コンシタ』といふ叫び聲がかゝるのです。それを聞くと私はふるへましたねえ。四方八方へと女は眼を配りました。ここには微笑、そこには洪笑、かしこには肩すくめ、花を受けるやら、酒をすゝるやら。女は私と面と向つて卓子にかけました、そしてコッフイを所望しました。

私は言葉をしつかとさせやうとしながら低聲で言ひました——

『ぢやおまへは何も怖くないのだな、コンシタ、死ぬることすらもな。』

『あたしを殺しはなさりますまい。』

『さうせよとおまへは望むのだな。』

『え、こゝでも、どこでもあなたの好きに。あたしあなたを知つてゝよ、

マテオさん、まるであなたがあたしの胸に九ケ月も入つてなすつたやうに。』

苦い非難叱責が引つゞいて出ました、そして私は女を痛罵しました。女は墓に誓ひをかけて、自分の貞潔を主張しておいて私から離れて行きました。

十

出來したあらゆる事件の後に於て、私の前には三つの途が開けて居るのでした——

永久に女を去ること、

無理にも女と同棲すること、

女の命を取ること。

私は第四の途を取つたのです。それは女が私を扱ふまゝに任したのですな。毎夕私は瞞着へ戻つて行きました、女を眺めて、待つて、待つて。

だん〳〵と、女は私に對する態度を柔らげて行くやうに思はれました、

時には女が事實に於ては實行されて居つた害を、私に對して全く企てゝは居ないやうすら思はれたのです。然し女の今私にさせて居る居酒屋生活は私にとても合ひません。合つた例もなければ合ふ筈もないのです。ペレス夫人もそこには居たのです。

女は何事があつたのかも知らないやうに見えました。女はうそを吐いたのでせうか？私はも一度女の傳記を聞きました、そして女の飲んだブランデーの代價を支拂ひました。

私の歡樂の唯一の瞬間は、コンシャの踊で飾られるのでした。女の誇はフラメンコオといふ踊でしたがな。何といふ悲慘な舞踊でせう！それは、言はゞ、三幕で表はされたる、ありとあらゆる煩惱でした。私はいつもその舞踊に女を見ました。女はそりや輝いて居ましたさ。一ヶ月の間、女は

化粧部屋と言つてもいゝところで私を苦しめました、それはダンスの演せられる舞臺の裏手にあつたのですが。私は女の家を見る權利もなかつたのです、私は條件付——過去に就いても現在に就いても叱責は言はないといふ——條件付で、私の『居處』を保つたわけです。未來のことゝ來た日にや私は何も知りませんでしたからね、そして靈肉兩者の最も憐れな冒險の解決がどうならうかといふことに就いては何等の觀念もなかつたのです。

それから夜が來ました、すると女は他の踊り手と一しよになつて踊りましたね、胸を剝き出して、二階の一間でね。そこには二人の富裕しい英國人が居りました。

私は女のところへ行つて言ひました——

『僕に蹤いておいで。怖がることはない。さ、おいで。來ないんなら氣を

付けるがいゝぜ！』

然しまた、女は挑んで來て私に反抗しました。

十一

一同は兩人ばかりを居殘して行つてしまひました。

『氣を付けろ。嘘を言へ。おまへは實にうそがうまいぞ！』私は叫んだ。

『あゝ、』女は答へましたね、『あなたはあたしをお責めなさるのね、飛切だわ！　泥棒のやうにこゝへ這入つて來て、あたしの踊をめちやにして、そしてみんなを脅かして追ひまくつてさ。』

非難、訴へくら、說明の例の幕が次いで開かれました。最後に私は女を膝に引き寄せました。

『お聽き、』私は言ひましたね。『僕はこんなざまにして生きては行けないの

だ。おまへがこゝにこれから一日でも居るやうなら、僕はもう永久におまへを棄てるぜ、コンシタ。』

すると女は私を愛して居る、これまでいつだつて愛して居た、と反抗がましく言ふぢやありませんか。

また女は例の言葉で私を撫で付けてしまつた、そしてその幕はよくある落でおしまひになりました――女の勝手といふところで、ふたりはセヴィールへ戻りました、そこで私は女に家を持たせました。その家で女は戀人があるやうな風をしたのですね。それはところが佯りでしたよ、がとうとう私は女の顔を毆つてしまひました。

女は私を突かうとしましたが、やりそこねました。それから私は自分の手を傷けるほどこつぴどく女を毆りつけました。女は跪いて免しを乞ひ

兩の腕を開げて私にすがりつきました。私は女を擁いてしまつた。女は生れた日のやうにも處女であつたのです。

十二

アンドレはセヴィールへ歸つた。彼はそこでコンシャ ペレスに會つた。彼等ふたりがパリーに向けて出發した時、女に宛てた幸便の手紙が一通渡された。やゝしばしの時日を經過した後、アンドレはその手紙が次のやうなものであつたことを知つた。

『わがコンシタよ、俺はおまへを許すよ。俺はおまへの居ないところは住むことができんのだ。俺の許へ歸つて來てくれ。今ははやおまへのまへに跪くのが俺なのだぞ、俺はおまへの足にキスするよ。マテオ。』

――をはり――

大正三年三月十七日印刷
大正三年三月二十日發行

（不朽の戀）

正價八拾五錢

不許複製

譯者　矢口達

發行者　東京市小石川區高田豐川町四十三番地　岩崎勝平

印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　神谷岩次郎

印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社

發行所　東京市小石川區高田豐川町　振替口座東京一五五七〇番　新陽堂

秋田雨雀氏著

戯曲集

幻影と夜曲

【大好評】
洋裝四六版裝幀優美
正價 七拾錢 小包八錢

批評

讀賣新聞。……初夏の青葉の世界が何かなしに人を化するやうに、果物の新鮮な香が倦怠した胸をそゝのかすやうに、雨雀氏の作品は氣持から氣持へ流れ込んで何等かの變化を讀者の胸に釀す。……背景も人物も白も科も凡てが一つに溶け合つて一つの音樂を奏する。……

摘載

トルストイ遺作

土岐哀果氏譯

隱遁

【大好評】
四六版洋裝美本箱入
正價七拾五錢 小包八錢

懷疑と矛盾と不安と苦悶との八十年の過去から遁れて、半夜窃かに僧院に隱れんとし、途上圖らずも荒寥たる一寒邑に斃れるまで、巨人トルストイの苦衷は、果してどんなであつたか。其の晩年の偉大な胸中の秘密を死後に發見せられた偉人自身のペンの迹によつて知ることは、實に何たる悲痛であらう。吾人は肅然として此の遺作を心讀しなければならぬ。

發行所　東京市小石川區高田豐川町　振替口座東京一五五七〇番　新陽堂

トルストイ著

矢口達氏譯

コサック

【大好評三版】
四六版洋裝
顔美本箱入
正價金一圓
小包內地八錢

若きトルストイを知らんとする人、トルストイの最も藝術的な作品を味はんとする人、華やかなれど悲しく、美しきが上に崇高きトルストイのロマンスを聽かんとする人——來りてコサックを讀まれよ。

批評

萬朝報曰く……貴族出身の青年士官オレニンがモスコを去りて南方コサックの地に向ふの叙述、アルプスの連峯が次第に其白き皺を現はし來る迄の彼の感じ等は眞に若き作家の入神の技也……自然に發達せる人々と都會に育てるものゝ自意識に悶ゆる心持とを描破せる所は驚嘆に値するものあり、譯筆は前譯アルネより一層洗練せられ、單に流暢なりといふ以外に、コサックの心持を現はすに適當なる描筆なりといふを得べし云々。

摘載

發行所　東京市小石川區高田豐川町　振替口座東京一五五七〇番　新陽堂

ダヌンツィオ氏著
矢口　達氏譯

巖の處女

『大好評三版』
四六版洋裝總布
特製美本箱入
正價金一圓十錢
小包內地八錢

空しく幽く荒れ果てたる庭園には、しづかな泉がとこしへの諧調をかなでて居た。美しくも儚ない三人の處女は、こゝに咲いてこゝに散つたのである。同じ憂愁と悲哀とを呼吸しつゝ、いたましい靈の織物を相共に織りなした三人の處女を、運命はいかに愛し、いかに弄んだであらう？

批評摘載

國民新聞。現代伊太利の文豪ダンヌンツィオが傑作を譯したるものにして『無限の優美と熱情と悲哀とを已にその中に表はした光と影とに充ちた顏の如く物言ふ名』なる三人の處女の匹ひなく哀れも深き戀のローマンス、絢爛譜謎を極めたる詞藻の美、情銳なる心理描寫、深刻なる性格解剖、さては南歐獨得の高韻と熾烈なる熱情と、蓋し新緑の窓下浮凡に倚つて繙くに最も適はしき名篇といふべく、先きにビョルンソンを紹介しトルストイを翻譯したる著者の譯筆は更に洗錬自在の歩を進めて玩誦するに甚だ可なるものあり推奬すべし。

發行所　東京市小石川區高田豐川町　振替口座東京一五五七〇番　新陽堂

オスカー・ワイルド著
矢口　達氏譯

架空の頽廢

袖珍美裝
價四十錢
郵稅四錢
（好評）

享樂主義耽美派の第一人者たるワイルドが、矯激なる論法と奇警なる言辭を擅にして「美のための藝術」「藝術のための藝術」を、最も警拔明快に論斷主張した對話體の論文である。向日葵の花を着け、孔雀の羽を振つて並樹大路を濶歩したる詩人、樂欲と歡樂に耽り、情熱の奔放に身を任せたる一世の奇才ワイルドの面目が紙面に躍動して居る。

アントン・チェホフ著
伊東六郎氏譯

女天下

袖珍美裝
價四十錢
郵稅四錢
（新刊）

世にも奇しきは女の運命である。婚期に迫りし若き處女が、日夜夢みる空想は果して何物か？歡樂か？悲哀か？モウパッサンと並稱せられる露國文豪アントン・チェホフが、大富豪の一處女を捉へ來りて、將に逝かんとする青春時の煩悶を纖細に描寫したるものが本書である。濃艶なる性格描寫の中に乙女の聲を聽き給へ。

發行所　東京市小石川區高田豐川町　振替口座東京一五五七〇番　新陽堂

ビヨルンソン著
矢口達氏譯

アルネ

【大好評三版】
四六版洋裝美本
定價金六拾五錢
小包 內地 八錢

ほんとに可愛いゝなつかしい小説です。少年アルネの行も考も、何といふ美さでせう。陰沈な北國の山間に、あのやうに歌つてあのやうに考へたアルネ、之は頓て著者ビヨルンソンの幼ない面影と見らるゝでせう。

批評摘載

讀賣新聞。『雨の日に「アルネ」の如き小説を讀むは、言ひ知られす細緻なる音樂の快感を生ず。例へば、極めて美聲を以て、艶物の長きサヅリを聽きつゝ玩味するが如し。「アルネ」の譯文の婉曲にして流麗なる、吾輩をして卷を措くことを知らざらしめ、讀了する間を、吾が書齋の雨に封鎖せられたるを忘れしめたり。』

ビヨルンソン著
鈴木悅氏譯

アルネの姉妹篇

アブサロムの髮

近刊豫告

發行所 東京市小石川區高田豐川町 振替口座東京一五五七〇番 新陽堂

270
249

終